

2022 年「第十二屆 全國大專院校暨高中職日語紙芝居比賽」 学科内選考会用原稿

来週 12 月 20 日（一）に行われます、2022 年「第十二屆 全國大專院校暨高中職日語紙芝居比賽」 学科内選考会用原稿です。

この 3 つの原稿から一つ好きな原稿を選んで、選考会当日読んでください。

原稿を覚える必要はありません。間違いのないように、スムーズに感情をこめて、ゆっくり読めるように練習をして、選考会に臨んでください。

選考会は、12 月 20 日（一）の午後 18 時より、N408 で行います。1 人ずつ会場に入って、読んでもらいます。時間は 1 人 3 分前後の予定です。

では、挑戦する学生の皆さん、がんばってください。

質問などがある場合、桑澤悟史老師までメールで連絡をください。
メールアドレス：kuwazawa72@stust.edu.tw

原稿 1

和尚さんと極楽風呂

昔あるところにお寺があつて、和尚（おしょう）さんが一人おつたと。

あるとき和尚さんは、法事（ほうじ）に呼ばれて、一軒（いっけん）の貧（まず）しい檀家（だんか）に行つたと。

お経を読んで法事が終わったら、その家のおつ母（か）さんが、

「私ン家（ち）はこのとうりの貧乏家ですから、何のおもてなしは出来ませんが、せめて
思つて、お風呂の用意ができておりますから、どうぞお入りになつて温（ぬく）もうて下さい」

というたと。そして子供を呼んで、

「お湯かげんはな、ぬるかったら焚（た）いてあげるんだよ」

と言いつけたと。

和尚さんは、

「それは何よりのごちそう。ナムナム」

というて、着物を脱（ぬ）いで入ったら、お湯がぬるかったと。それで風呂の中から、外の焚（た）き口にいる子供に、

「少しぬるいから、火を焚（た）いてくれんか」というたと。

そしたら子供が、「焚くもんが無い」というから、

「焚くもんがなかったら何でもええわ。その辺の物を何でも燃（も）やしてくれ。寒うて
いかん」いうてやつたと。

子供は、そこここからいろんな物を集めて燃やしたと。

湯がだんだんぬくうなつて、和尚さんは、

「ごくらく、極楽（ごくらく）」

というて、気持ち良さそうに湯につかつておつたと。

「ええ湯かげんだつた」

というて出て来たら、着物が見あたらん。

「…たしか、ここへ脱いで置いたんだが……」。

「ここにあつたわしの着物、どうしたんか。どこかにしまつてくれてあるんか」
と子供に聞いたら、子供はすまして、

「いいえ、和尚さんが『何でもええから燃やしてくれ』いいましたから焚きました」
というたと。

「ありゃあ、なんとわしの衣（ころも）を焚いたか。どうりで極楽のはずじゃ」

と、こういうところへ、この家のおっ母さんが、奥から、

「温（ぬく）うなられましたか」

というて、来る気配（けはい）がした。

「こりゃいかん」

和尚さん、あわてて手ぬぐいを前に当てがっておろおろしたと。

子供がごぼうの葉を二、三枚むしって来て、

「和尚さん、これ」

というて差し出したら、和尚さん、それを受け取って、前後（まえうしろ）に当てがって、ほうほう、というて帰っていったと。

さん候（そうろう）。

原稿 2

『正月神様』

むかし、あるところに爺さんと婆さんがおって正月神様がおかえりになる日に雨がドシャドシャ降ったと。

爺さんと婆さんがお茶をのみながら、

「この雨はやみそうにもないのう」

「ほんに、正月神さんもなんぎされてござらっしゃるじゃろ」

と話しておったら、間がええちゅうか、そこへ七人の正月神様がかけこんで来たそうな。

「爺さ、爺さ、笠（かさ）か蓑（みの）をかしてくれぬか」

というので、爺さんと、婆さんは家中（いえじゅう）をさがしたと。

蓑と笠を四つみつけて、四人の神様にお着せもうしたが、残り三人には着せるものがないのだと。

もいちとさがしたら、古いバンガサが二本見つかったと。二人の神様に差しあげたが、どうしても一人分たりない。

そこで、一枚だけ残しておいた爺さんが仕事をするときに着る合羽（かっぱ）を差しあげたそうな。

七人の神様は、礼を言って雨の中をかえっていかれたと。

爺さんと婆さんは、

「まず今日は何よりも良いことをした」

と、ころほかほかして寝たそうな。

それからしばらく何の変わったこともなく、春夏秋冬ときて、また大晦日（おおみそか）をむかえたそうな。

大つごもりの晩に、爺さんと婆さんが「年越しの用意も出来ぬし困ったわい」と話していると、外で話し声が聞こえて、また七人の正月神様が入って来られたそうな。そして、

「爺さ、婆さ、せんだってはおありがたかった。お礼にお前たちに福を授けに来た。何が欲しい」

という。爺さんと婆さんが、

「わしんちはこんな貧乏な家じゃけ、年を越せんでこまっちゃった。年を越せるだけの金と米があればええ」

とありがたがると、七人の正月神様は打ち出の小槌（こづち）をくれたそうな。そして、

「この小槌を打てば、何でも好きなものを出せる」

といって出て行かれたと。

ところが、七人の神様のうち、一人の神様があとに残って、

「爺さ、婆さ、まだ欲しいものがあるのではないか」

ときくのだと。

その神様は、爺さんの合羽を差し上げた神様だったそうな。

爺さと婆さは

「やや子が欲しい」

というたと。

「それでは、明日の正月の朝がきたら”おめでとうございます”と二人があいさつさえすれば若返るから、それからややこをつくるがよい」

と言うたそうな。そして、その神様も出て行かれたと。

元旦の朝になって、言われたとおりあいさつすると、たちまち二人は十七、八の若者とあねさんになったと。

それから二人は、ややこも授かって、お米もお金も出して一生安楽に暮らしたそうな。

むかしまっこう。

原稿3

かわうそのおんがえし

むかし、あるところに貧（まず）しい男がおって、野良仕事（のらしごと）をして暮（く）らしておったと。

あるとき、男は牛（うし）に草を食べさせようと、家から少（すこ）し離（はな）れたところにつないでおいたと。

ほしたら、そこへいたずら者のかわうそがやって来て、おもしろ半分に牛の背（せ）に飛（と）び乗（の）ったり、しっぽを引っぱったりして遊んだそう。しまいには、綱（つな）を引きずって川の方へ連（つ）れて行こうとして、その綱を自分の体にくくりつけて歩きはじめた。ところが、牛の方は草を腹いっぱい食べたので牛小屋（うしごや）へ帰ろうとする。

かわうそは、ぐいぐい引きずられて、綱をとくにとかれず、とうとう牛小屋まで連れて行かれたと。

この有（あ）り様（さま）を見た男は、

「こりゃ、たまげた。りこうなかわうそがうちの牛に捕（つか）まるとは」と、驚（おどろ）くやら、あきれんやら。

「どうれ、今夜はかわうそ料理といくか、こりゃ、かわうそ、皮（かわ）をはがれるときは痛（いて）えぞお。ベリッ、ベリベリッて」と、おどかすと、かわうそは、必死（ひっし）になって、「もう、これからは決（けっ）していたずらはしませんから、どうぞ助（たす）けてくださあい」と、あわれな声で泣（な）いて頼（たの）むんだと。

「本当にせんか」

「はい、約束（やくそく）しますう」と言うので、綱をほどいてやったと。

「ありがとうございます。お礼（れい）におらの出来ることをしますけん。この家の軒（のき）にものを引っかける鉤（かぎ）をつけておいてください」と言うて、去（さ）って行ったと。

次の日の朝、男が軒を見ると、大きな鯛（たい）が鉤に引っかけてあった。

男は喜んで、めったなことでは食べたことのない、その鯛を家じゅうで食べた。

次の日の朝も、その次の日も、毎日、毎朝、鯛が引っかかっておったと。

毎日続（つづ）く、かわうそのお礼に、男はつい欲（よく）を出した。

もっと大きな鉤をつけたら、何匹（なんびき）も鯛を引っかけてくれるのでは……と思って、以前、山で捕（と）った鹿（しか）の角（つの）を、軒につけたと。

ほしたら、それからさっぱりで、毎朝待てど暮らせど、鯛はおろか、小魚（こざかな）一匹引っかけてくれなくなったと。

かわうそは、鹿の角が怖（こわ）かったそうな。

むかしこっぷり。

『ふしぎな手拭』

とんと昔、ある村の一番（いちばん）大きな金持（かねも）ちの家へ、ある日、ひとりのみすぼらしいなりをしたお遍路（へんろ）さんがやって来たそう。

門口（かどぐち）に立って、御詠歌（ごえいか）を歌（うた）い、何がしかの寄進（きしん）を乞（こ）うたと。

すると、そこの奥（おく）さんは、

「このせわしいときに、お前なんぞにとりあっていられん。さあ、とっとと出て行き」と言うて、邪険（じゃけん）に追（お）い払（はら）ってしもうた。

この様子（ようす）を、この家（いえ）の女中（じょちゅう）さんが見ていて、こっそり握（にぎ）り飯（めし）を作ると、いそいそお遍路さんのあとを追（お）いかけ、

「お遍路さん、お腹（なか）が空（す）いたでしょう。これでも食べて」と言うて、お握りを渡（わた）したと。

ふしぎな手拭挿絵：かわさき えり

するとお遍路さんは、

「これはほんのお礼（れい）です。受（う）け取（と）って下され」と言うて、白い手拭（てぬぐい）をくれたと。

あくる朝、女中さんは顔を洗（あら）い、お遍路さんからもらった手拭で顔をふいた。ご飯の支度（したく）に台所（だいどころ）へ行くと、みんなから、

「色が白うなっている」

「きれいになってえ」

「昨日とずいぶん違（ちが）いやな」

と言われた。

そこで鏡（かがみ）を見ると、見違（みちが）えるほどの色白（いろしろ）のべっぴんさんになっておったと。

「どうして」

「何をしたら、そうなるの」

みんなが根（ね）ほり葉（は）ほり訊（き）くので、昨日のお遍路さんの話をすると、それが奥（おく）さんの耳にも届（とど）いた。奥さんは、

「ほんなことなら、私も何ぞやるがじゃった」

と残念（ざんねん）がり、女中さんと呼（よ）びつけると、

「ええかね、今度（こんど）あのお遍路さんを見かけたら、じきに知（し）らせてよ」と、言いつけたと。

それからしばらくして、お遍路さんは、また村へやって来た。女中さんが見つけて、家へ招（しょう）じ入れたと。

「奥さま、この間、私に手拭をくれた方が見えました」

と言うたら、奥さんはニコニコして、

「さあ、何でも欲（ほ）しい物をあげるよ」

と言うて、手あたり次第（しだい）に物をやったと。

するとお遍路さんは、お礼だと言って、帯揚げ（おびあ）げをくれた。

奥さんが喜（よろこ）んで、早速（さっそく）締（し）めてみると、帯揚げはいつの間にか蛇（へび）になって、赤い舌（した）をシュー、シューと出したと。

奥さんはウンと唸（うな）って、気を失（うしな）ってしまったと。

むかしまっこう 猿まっこう

猿のつべは ごんがりこ。